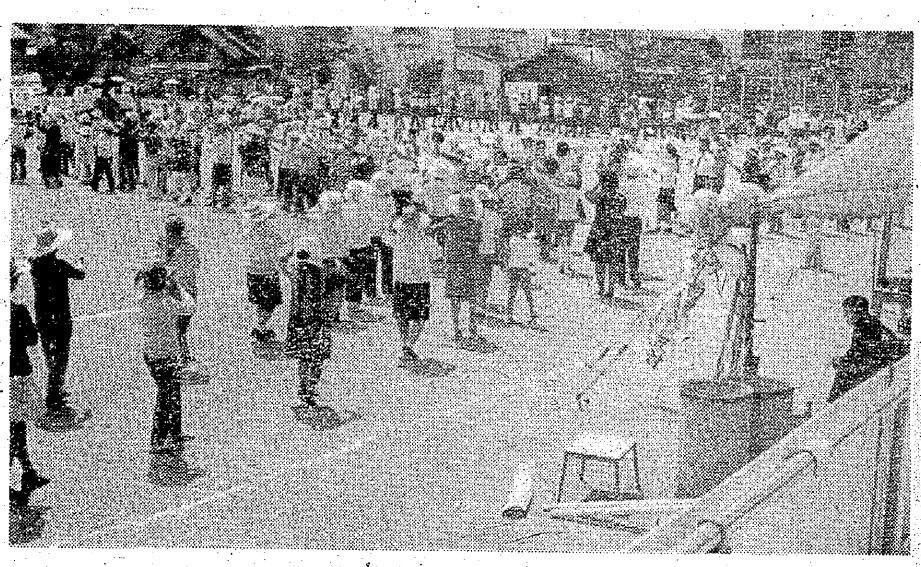
素晴しかつた運動会

主婦の団結、ありありと…

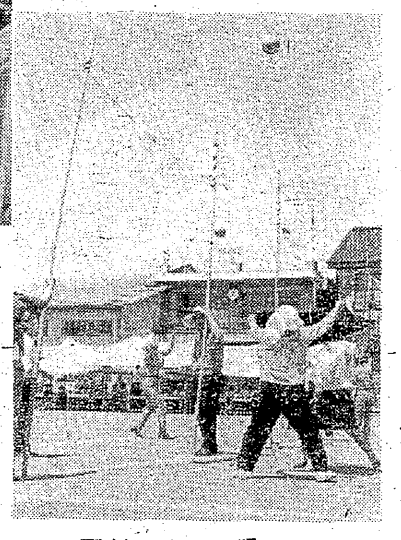
7日の「三池主婦会」主催の運動会は、競技に応援に、じいちやんばあちやんから乳のみ児まで参加。こぼれるばかりの初夏の太陽のひざしの下で、力いつぱいのはずみようだつたが、そこに主婦会の変らぬ団結がありありと息づいていて心強い限りだつた。（不知火小グランドで）



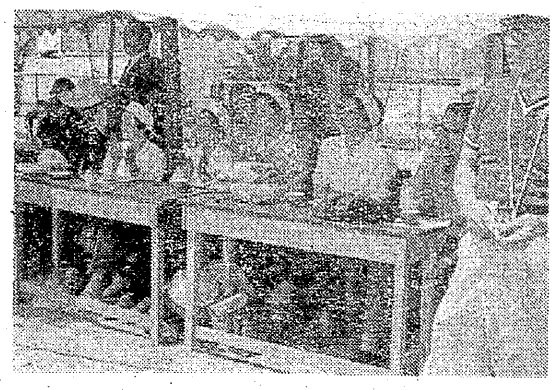
参加者全員打揃つて〝炭坑節〟をひと踊り

よい子も負けるな

父ちゃんがんばれ



団結と統一球うけ



迎えたお客さん

主婦会運動会に迎えたお客さんは、まず三菱高島炭鉱主婦会の湯上ゆき会長に、後藤咲子さんと深松静子さんを。また、連帯を結び闘っている水俣の主婦会から、東野照子さん、近藤フミ子さん、津川春子さん、松田クニ子さん、松田玲子さん、花田キヨノさん、志水マツヨさん、荒川トモエさん、それに組合員の花田俊雄さん。ほんとにご苦労さまでした。

荒尾で進む地域活動

荒尾市では、三池労組の地域分会と政治局員とが固く結びながら、地域活動がいろんな形でもりあがっている。

宅地造成への悩み解消へ

緑ケ丘A地区協

緑ケ丘地区A地区協議会の地域新聞〝みどりが丘〟（NO一八。五月十日発行）は、居住民のめいわくをそっちのけにして進む〝三池開発〟の宅地造成工事に、怒りの声をあげている。

次は、同新聞の記事である。

――三月十五日より着工された桂町下の宅地造成工事により、みどりが丘（荒尾市）の住民は、幾多の迷惑をこうむっています。

▼数台のブルトーザーの騒音のために、周囲の人たちの悩みはなはだしく、とくに三番方の人は眠れないといってくやんでいます。

大型ダンプショベルの振動で、ときにはタナのうえの茶わんが落ちることもあります。

▼小学校前や桂町道路は、赤土でメチャメチャになってしまいます。

雨が降れば、いままでも通れなかったこれらの道路は、ますます悪くなり、小学校前など、歩道のない所は土手の上を通っている始末です。

▼天気の良い日は、ほこりに悩まされ、採土・運搬途上の各家々では、雨戸と、ガラス戸をしめていても、板の間に指で字がかかれる位にほこりがたまるときもあります。

以上の通りであるが、すでに同A地区協議会としては具体的に関係当局に対して、適切な処置をとるよう働きかけを開始しているが、とくに荒尾市としては、「応急処置としてバラスを入れ、舗装道路上の整備を行ない、今後はそのつど対策を立てること」を確約したというが、さらに働きかけを続けていくと。

おわび

紙面のつごうにより、今号だけ「マスター・プランを斬る」は休載させていただきます。

――編集部

心から敬老会

四小協・守る会が

荒尾四小校区協議会と同CO患者守る会は、共催の形をもって去月二十日〝敬老会〟を開催。バス二台を借り切って遠く山鹿温泉（温泉センター）まで飛ばし、まさに大にぎわい。老人たちにとっては、年令を忘れる一日となった。

同校区協議会は常にCO守る会と相たずさえながら、積極的に住みよい街づくり運動をすすめていることは、周知のところ。

その活動のなかにもちこまれてきた街の声が、「住みよい街づくりはけっこうだが、老人を楽しませる行事が忘れられてはいないか」、ということだった。もちろん他の例にもれず、同校区にも官制的な〝老人会〟はあるが、これという活動があるわけでもなく、この声のでるのも当然だった。

「よし、やろう」、となってこの催しとなったもので、この日集まってきた老人は百人。

話を聞いて、同市の〝丸吉かっぽ〟は、その日一日間を休業。歌い手、踊り手、ひき手までも伴って応援。同温泉センターはじまって以来の、にぎわいだったと。

歌い足りなかった老人は、帰りバスでもマイクを離さなかったというが、主催側では、「ぜひ来年も…」といきまいている。なお協議会の会長は黒田末雄さんで、守る会の会長は小里透さん。

安見

ついに帰らぬ人となったひろしへ

吉野　中川美津子

原爆のて与えねばならず、ミルクで育てた。

落ちし日　当時、子どもには森永製品が

我は北満　の住む家　一番よいとの広告を見て、私は

棄てて逃　それまで使っていたレーベンス

れきたれり　ミルクを、わざわざ森永にかえてしまった。

満洲とソ連との国境より、ソ　赤ン坊会なるものまで計画

連軍の越境攻撃を受けながら、　し、小児科の先生達を動員し、

生後一年四カ月の子どもをつ　森永乳業は、そのころ製品の売

れ、着のみ着のまま、私は逃げ　りこみに力をいれていた。

て来たが、主人たち男子は皆戦　その年の四月、子どもが、突

争になお勝つつもりで、国境に　然原因不明の熱を出して、私た

のこった。　ち夫婦はあちこちの小児科を歩

私はそのため、終戦の翌二十　き、九大病院へもいったが、夜

一年の七月、帰国途中一人の子　も一睡もせず泣く子どもに困

どもを死なせ、行方のわからぬ　り、親子共ども泣く日が続い

主人の安否を気づかいながら、　た。

故郷へ引き揚げたところで、二　ミルクを飲ませようとすると

カ月先に帰ってきていた主人と　「いやいや」をいって、乳くび

めぐりあった。　を押し出す。私はそれを、「乳

主人は、就職難の時代のこと　を飲まぬと死ぬよ」、と頭をお

で、母が港務所の三川の寮につ　さえ、子どもの口にひとサジず

とめていた関係で、港務所へつ　つ流しこんだ。私は、そのミル

とめていたことがわかった。　クに、恐しい毒がはいっていた

私は、二十七年のこと、苦し　のをしらなかったのである。

い家計のいくらかの足しになる　続く高熱。やせ衰えてしま

ように、とつとめはじめた。　い、子どもは骨に皮がかぶって

そのため、生まれた子どもの　いるだけ。

ひろしには、人工栄養をつくっ　やがて、目も見えなくなっ

た。

その後八月二十五日、森永ミルク中毒に関する新聞発表があるまで、「人工栄養児の奇病」がいわれ、その検査をひきうけた大学の病院でもわかっていたというのに、森永会社から口止めされていたのだろう。

そのかげで、日一日と死んでゆく乳児がふえていった。つぎつぎに、百三十人も死んだ。

大牟田でも、沢山ミルクをのませていた人がいたはずが、ほとんど届け出を怠っているが、私宅の当時のメモには二十七人の死亡児の名前が記入されている。

それでも、〝中毒〟との認定がなかなかされぬまま、子どもは刻一刻死期に近づきつつあった。今にも死にそうで、ただ息だけしていた。それに、心臓だけがコトコトと……。

四十度の高熱はとれず、私はそれでも、森永ミルクをずっと飲ませ続けたのだった。そのミルクに毒が入っているなんて。何という、企業の責任のなさだろう。

そのうち、〝中毒児〟とされこそしたが、森永乳業からあいさつにきて五千円。その年の十二月、五人委員会の話し合いのあと五千円渡しただけで、会社はこれで終ったものとしているが、子どものひろしは、口も、手足もきかず、立つも座るもできず、排便、排尿さえ、一人ではできなかった。

それより、食べること自体できず、私は、のりのようなおかゆを十三年間たきつづけ、おしめを十三年間洗い続けた。一時は余りの苦しさに、親子で幾度死のうと思ったことだったろう。

その間、三池の闘いはますますはげしくなり、主人はホッパーへつめたきり、帰ってこない日が続いた。私は弱音をはくものかと、この子どものため、主人のためにと、必死だった。

私も八年間の苦労が実って、養護教諭となることができたが、昭和四十三年六月二十三日子どもひろしはついに十四才でこの世を去っていった。

その日も、人の命をあずかる養護教諭であるために、私はつとめに出ていたが、知らせがあって帰ると、一時間後にはもう息をひきとっていった。

両親の手をとっていたひろしがいなくなって見ると、私たちはちょうど手のなかから玉を取られてしまったように思われ、淋しく、悲しく、泣き明かす日が続いていった。

胸のなかのくやしさ。それはやがて、森永への怒りとかわっていった。森永の会社は、過去十何年間、一度だって「お子さまのその後はどうですか」、と聞いてくれたことがあったろうか。

幼い乳児たちの命を奪いながら、森永は企業としてますます栄えている。売られている品は何百種。「皆さん、森永の製品は買わないで下さい」、と、どうして叫ばずにいられよう。私は、森永を絶対許すことができない。いや、森永と闘いただけで、身ぶるいがする思いである。

ひろしも、育っていれば高校の三年生。いま、その高校の子どもたちの間からさえ、知能低下・難聴・脳波異常・視力障害・疲れ易さ・関節痛・てんかん状発作・色素沈着などの症状が出てきている。

私は、ひろしの死を犬死のままにはしておくことができない。そのためにも、第二の〝森永ヒ素ミルク中毒・カネミオイル中毒の発生〟を許さないように、私はいまあらゆる人びとに呼びかけている。